

居住地と活動地に対する歩行意識の関係分析～大型モール施設のケーススタディ～

名城大学 学生会員 ○大矢 周平
名城大学 正会員 中村 一樹

1. はじめに

社会保障費の増大への対応策として、日常的な身体活動量の増加を目的とした歩行の促進が進められている。しかし、居住地周辺の歩行環境が必ずしも良いとは限らず、その再整備は車依存が進んだ都市ほど難しい。一方で、日常生活は居住地だけでなく様々な活動を行う場で成り立っており、その活動地にはより歩行に適した環境があると考えられる。車依存都市における歩きやすい活動地の1つとして、大型ショッピングモールが挙げられる。近年では、モールウォーキングといった健康歩行の取り組みも始まり、都市拠点としての役割も期待される。

そこで本研究では、居住地とモールにおける歩行環境と歩行意欲の関係を分析する。まず、文献レビューより歩行促進に影響を与える要因を整理する。次に、モール来訪者に対して予備調査を行い、日常生活とモールにおけるそれぞれの歩行で重要視される要因を把握する。最後に、居住地とモールの歩行環境に関するアンケート本調査を行い、モールの歩行意欲に影響を与える要因を分析する。

2. 分析手法

2.1 文献レビュー

既往研究では、歩行促進は、健康意識、交通行動、空間整備の観点から分析されている。中井ら¹⁾は、健康歩行促進に関する情報提供による交通行動変容効果を明らかにしている。この結果、歩行促進によって、買い物における自動車利用の減少と徒歩の増加が観測された。また、健康意識の高い被験者や、運動頻度の高い被験者は歩行量が増加しやすい傾向にあった。また、杉浦ら²⁾は、世代別に見た歩行阻害要因を明らかにしている。この結果、若年層では、歩行空間の安全性や一緒に歩く仲間がいないこと、高齢層では、休憩所、トイレ、水飲み場がないことが阻害要因として示された。しかし、居住地と活動地の歩行意識の関係は分析されていない。

表-1 本調査のアンケート概要

アンケート項目	項目	概要
	属性	性別、年齢
	交通習慣	自動車の利用頻度、自動車への好み
	歩行習慣	1日の平均移動歩数、歩行への好み
	モールの利用習慣	滞在時間、来訪頻度、自宅からモールまで移動時間
	健康意識	運動の頻度、健康への関心、健康状態に対する満足度
	歩行環境	各活動施設への歩行容易性（日常的な買い物施設、非日常的な買い物施設、生活施設、飲食店、教育施設、医療施設、運動施設、娯楽施設、文化施設、地域施設、子供の遊び場、交通施設）
		歩行空間の質（トイレや休憩所の利便性、安全性、快適性、楽しさ、にぎわい、人との交流、疲労感）
	行動意欲	歩行意欲

2.2 調査手法

本研究では、活動地としてのモールでの歩行意欲の影響要因を、居住地の環境を考慮して分析する。仮説として、居住地の歩行環境が良くないことは、活動地であるモールの歩行意欲を上げ得るのかについて検証を行う。モールウォーキングに取り組むイオンモールナゴヤドーム前をケーススタディとし、来訪者にヒアリング調査を行った。

まず、2019年9月23日に行った予備調査では、居住地とモールでの歩行において、重要視される要因を把握した。具体的に、交通、空間、生活の質、制約の観点から、歩きたいと思える理由と歩きたくないと思う理由をそれぞれ質問した。次に、2019年12月5日に行った本調査では、予備調査の結果を基に、居住地とモールの歩行環境と歩行意欲について、アンケートを作成した（表-1）。まず、個人属性、交通習慣、歩行習慣、モールの利用頻度、健康意識について質問した。そして、居住地とモールそれぞれの歩行環境について、周辺の活動地への歩行容易性（歩行頻度）と歩行空間の質に加えて、歩行意欲を、10段階で評価した。これらのアンケート調査の結果、予備調査では114人、本調査では40人から回答を得た。

3. 歩行行動の影響要因の把握

予備調査の歩行意識に関するアンケート結果から、居住地とモールの歩行で重要視される要因について

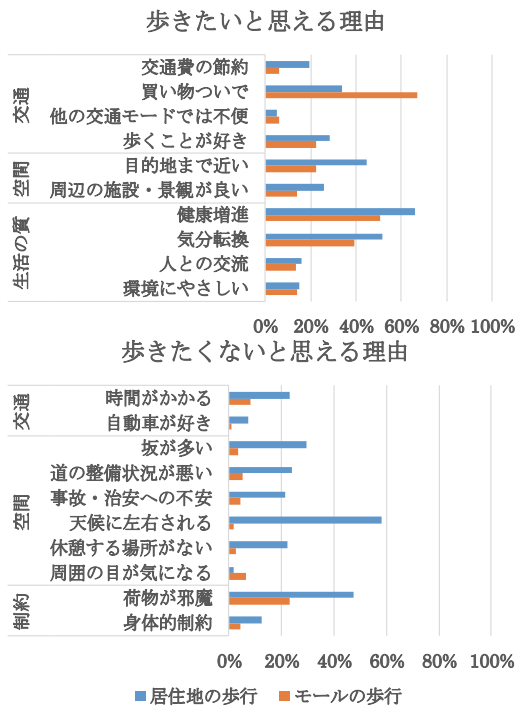


図-1 歩行で重要視される要因の把握

把握する。図-1 に歩きたいと思える理由と歩きたくないと思う理由の割合を示す。この結果、歩きたいと思える理由について、モールの歩行に比べて居住地の歩行では、「目的地まで近い」が多いことが分かった。これは、居住地の徒歩圏内に活動地が多いことで、歩行意欲が高くなることが考えられる。また、健康増進、気分転換の項目が共に高く、健康意識が高い人は、より歩行行動の意欲が高いことを示している。

一方で、歩きたくないと思う理由について、居住地に比べてモールの歩行では、坂が多い、天候に左右される、休憩する場所などの「空間」に関して、大きく障害が減ることが分かった。しかし、これらの阻害要因はモールでは大きくなく、その歩行空間としての質の高さを示している。

4. 歩行環境と歩行意欲の関係分析

モールの歩行意欲に影響を及ぼす環境要因を明らかにするために、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。目的変数はモールの歩行意欲とし、説明変数は、属性（2 指標）、交通習慣（2 指標）、歩行習慣（2 指標）、モールの利用習慣（3 指標）、健康意識（3 指標）、歩行環境（38 指標）の計 50 の指標を用いた。歩行環境に関する指標については、居住地とモールそれぞれについて、各活動地の歩行容易性（12 指標）と歩行空間の質（7 指標）を用いた。

この結果、まず、個人属性や健康意識では、年齢が高く、健康への満足度が低い人ほど、モールでの歩行

表-2 歩行意欲に与える影響要因分析

モールの歩行意欲				
説明変数		B	t	
属性	年齢	0.654	4.664**	
交通習慣	自動車の好み	0.381	2.872**	
歩行習慣	歩行の好み	0.376	3.599**	
健康意識	健康への満足度	-0.451	-3.174**	
モール内の歩行容易性	非日常的な買い物施設	0.247	2.287*	
モールの歩行空間の質		楽しさ	0.853	5.611**
居住地の歩行容易性	飲食店	-0.347	-2.496*	
	娯楽施設	-0.334	-2.577*	
	文化施設	-0.492	-3.904**	
	地域施設	0.397	3.495**	
	子供の遊び場	-0.410	-3.063**	
居住地の歩行空間の質		疲労感	0.373	3.926**
R ²		0.7459		
サンプル数		40		

B：標準偏回帰係数,*p<0.05,**p<0.01

意欲が高いことが分かった。これは、モールが高齢者の健康目的の歩行促進の場として有効であることを示している。モールの歩行環境については、非日常的な買い物施設への歩行容易性と歩行空間の楽しさが、歩行意欲と正の関係があり、特に楽しさとの関係が大きいことが示された。

一方で、居住地の歩行環境については、飲食店、娯楽施設、文化施設、遊び場といった歩行容易性は、モールの歩行意欲とより負の関係があり、疲労感も正の関係があることが示された（表-2）。これは、居住地の歩行環境が良くないことで、活動地であるモールの歩行意欲を上げ得ることを示している。

5. 結論

本研究では、居住地と活動地の歩行意識の関係について分析した。この結果、活動地としてのモールの歩行意欲に関して、モールの歩行環境だけでなく、居住地の歩行環境も関係していることが明らかになった。モール歩行環境については、より楽しく歩ける空間が歩行意欲を高めることが示された。一方で、居住地の歩行環境については、飲食店や娯楽施設等への歩行容易性が低いことも、モールの歩行意欲を高めることが示された。これらの結果は、モールを活用した活動地における歩行促進の可能性が示唆している。

参考文献

1) 中井祥太, 谷口守, 松中亮治, 森谷淳: 健康意識に働きかける MM の有効性—万歩計を用いた健康歩行量 TFP を通じて—,土木学会論文集 D,Vol64(1),pp45-54,2008

2) 杉浦裕二, 坂本淳二: 市民意識調査にみる都市のウォーキングコースのあり方に関する課題, 都市計画論文集,Vol41(3),pp1001-1006,2006